

— 一つのアジア大衆文化の成立なのか

□この10年になにが起こったか——80年代から90年代へ

- 1) 消費社会の80年代 ~ 冷戦末期 自由主義世界=アメリカ極世界
- ・円高 日本資本主義の成熟
 - ・DCブランド
 - ・コンビニ
- 2) ネットワークの90年代 ~ ポスト冷戦
- ・ベルリンの壁崩壊 ……弾丸ではなく、情報が壁を破った
 - ・情報の加速度的増大
 - ・冷戦構造のリストラ EC、WTO、中国の改革開放、日本の55年体制崩壊
- ⇒単一市場への統合が、アジアで急速に進みつつある

□これからアジアでなにが起きるか

- 1) アジアの多様性
- ・冷戦の遺産 体制の壁 社会主義/自由主義
 - ・日本の負の遺産
 - ・民族、文化、言語、歴史、宗教、風土、……の壁
- ⇒これまで、アジアというまとまりができたことはなかった
- 2) アジアの一体感が成立するか
- ・政治的な統合の試み アメリカのプレゼンス、中国の台頭、……
 - ・経済的な統合の試み APEC
 - ・文化的な統合のプロセス? アジア大衆文化の越境

[タイム・テーブル]

- 13:00- コーディネーター、パネリスト紹介
- 13:05- 前説(橋爪)
- 13:10- 報告1(齋藤) } 時間内に収まるようご協力ください
- 35- 報告2(白石)
- 55- 報告3(呉)
- 14:15 コーヒーブレイク
- ~ [質問用紙の回収・整理]
- 14:30- 質問に答える~齋藤(&討論) } 10分以内をお願いします
- 40- 質問に答える~白石(&討論)
- 50- 質問に答える~呉(&討論)
- 15:00- 言寸言論(テーマを3つぐらいに絞ります)
- 15:40- フロアからの発言(質問・意見)
- 15:50- 最後の発言(1人2分程度)

* 最大10分間の延長可能

無条件降伏! 時に昭和十七年二月十五日午後七時五十分
攻城僅七日・無敵陸軍の威力

[二月一六日・読売新聞] 大本営発表(十五日午後十時十分) マレー方面帝国陸軍部隊は本十五日午後七時五十分シンガポール島要塞の敵軍をして無条件降伏せしめたり。

+

思へば昨年十二月八日、山下覆面將軍の率いるわが精鋭大兵団が北部マレーに壯絶無比の敵前上陸を敢行して以来七十日、ジョホール水道の火焰の海を強行渡過して以来僅か七日にしてマレー半島一千キロの碎敵縦断と不落の要塞の肉弾奪取を達成し得たことは、さへぎるものは何ものをも突破せずにはおかぬ皇軍精神の凄絶さと、皇軍作戦の至妙さによつてのみはじめてなし得る大戦果であつて、まさに世界戦史上空前の驚異的猛電撃作戦といはねばならない。

+

……まさにシンガポールの失陥は大英帝国の弔鐘そのものであるといふべきである、また致命的打撃はイギリスのみでなく、なほ長期抗戦を豪語するアメリカにとつても、その九割を南洋に依存するゴム、錫その他の国防資源を全く壟断されるのみならず、地球西めぐりコースをもつてするイギリスとの連絡線は殆ど遮断の悲運をみるに至つてその受くる打撃またイギリスに劣らない。

一方帝国はこれによつて西南太平洋を完全にその制圧下に収め、南支那海、南洋、蘭領東インドをその腹中に包摂し得て大東亜共栄圏の基礎はここに略完成、……一億火の玉となつて聖業貫徹に突進するのはまさにこれからなのだ。

±

昨年十二月八日に、山下將軍の率いる日本軍が北部マレーに上陸してから七十日、ジョホール水道を渡つてから七日で、マレー半島一千キロを縦断し堅固な要塞を陥れたのは、軍隊の士気が高く作戦もまず妥当なものであつたことを示し、予想を上回るスピードであつた。

-

……シンガポールを失つたことでイギリスは威信を傷つけられたが、アメリカはゴムや錫の輸入ができなくなった程度である。

-

思へば昨年十二月八日、山下將軍の率いる日本軍が大挙して、北部マレーに突如上陸侵攻してきてから七十日、ジョホール水道での勇敢な抵抗をはじめ、わが軍は圧倒的な大軍を相手によく戦つた。日本軍が一千キロを迂回してようやくこの孤立無援の要塞を奪取できたのは、戦闘員・非戦闘員を区別なく殺傷する日本軍の猙獰さと、相手の裏をかく奇襲作戦のせいであつて、世界史に残る暴挙と言わなければならない。

1995-11-②/18

エスノロジー・会話分析研究会
研究例会・書評セッション
於：明学大白金新本館1301

書評：山崎敬一『美貌の陥穽』（1994）
“局域”分析は何を実証するか

1995. 2. 4
橋爪大郎
（東工大）

□ 本書の構成 ☆……今回の書評対象論文

- 序章 エスノメソドロジーと性別カテゴリーの問題（1994）☆
- 第1章 会話の順番取りシステム +好井裕明（1984）
- 第2章 沈黙と行為 +江原由美子（1993）
- 補論 男と女（1985）
- 第3章 美貌の陥穽（Ⅰ） +山崎晶子（1994）☆
- 第4章 美貌の陥穽（Ⅱ） +山崎晶子（1994）☆

* 議論を時系列でみていく必要上、書評対象論文以外の論文についても順に言及する。

□ 第1章 山崎+好井[1984]

Q：会話分析は“隠れた権力”を明るみに出すか？

* 《「割りこみ」は日常的な会話場面で、自由にさまざまな行為をしたり、現実を構成していく作業を極めて自然な形で、侵害していく権力現象である》(44) ∴《会話における順番取りは、互いが話したり聞いたりする権利と義務の交換過程と考えることができる》(38) ⇐話をする／聞くことを、「権利」「義務」と呼んだことの直接の結果？

□ 補論 山崎[1985]

Q：エスノメソドロジーは、アンチ・性差別のための有効な理論装置・分析手法なのか？

* 《「女」は、女性としての諸特性を備えているという理由で、会社からしめだされているわけではない。》(107) 《問題は、こうした根拠のない排除が就職における男女差別などの形で、なお現代社会において存続しているということである。》(110) ⇐しかし、性別カテゴリー（による差別）は二重に合理的ではないか？ ∴①そのカテゴリーが現に社会的現実として機能している。②“子供を生むかも”という推定は有意味。

* 企業の“女性を雇用することに伴うリスク”を補償する措置を講ずることが先。

□ 第2章 山崎+江原[1993]

Q：《異性間の会話の問題は取りあげていない》が、権力の問題はどこへ行ったのか？

* 《文脈の複数性や規範の複数性が、行為の不決定を導くのではなく、ある形式化された慣性的行為を導く》(47) ⇒因果関係が錯綜し、論文の構成が見えにくくなった。

* うなずきに関する分析～《女性同士の会話の場合には……互いに対する「親密性」を提示することが要請されている可能性がある》(80) ⇒《「男性文化／女性文化」の存在という解釈を再導入してしまうことになるのでは》(204 by 江原)

□ 序章 山崎[1994]

Q：会話分析の実証性（その分析の正当性）は、どのように確保されるのか？

* 《問題は、研究者が、そこでの場面の組織化とカテゴリーを用いた記述の組織化の結びつきの仕方を適切な仕方で、同じ言語を話す他の人々に示せるかどうかである。……それは決して、場面参与者のその場面における本当の意図や志向を捉えようとしたものではない。》(20) 《研究者にとって必要なのは……ある事態に対して同語反復的でない別の説明を論理的に再構成することである。……結局は同語反復的なものだという可能性もある。……もう一つ説明を与えることは、それでも意義がある。》(25-26) ⇒チョムスキーの言うような「外的規準」が立たずに、要するに説得力の問題（密教）になる？

* カテゴリー化の一般問題：《どのようにしてカテゴリーを実際の人間に適用するのか》(11) カテゴリーの一般化の問題：《どうしてある一つのカテゴリーが一つの場面だけでなく、さまざまな場面で使われるのか》(19) ⇒それがカテゴリーなのでは？ cf. 状況理論

□ 第3章&第4章 山崎+山崎[1994]

Q：ここで分析されている事例は、果たしてセクシュアリティとどこまで関係があるか？

* 参与者を除外する実践～《参与者への個人的非難や侮辱の可能性を潜在的にはらむという問題を、場面的に解決する。》(135) →カテゴリーの一般化と結びつく

予期的モニター～《話し手は、聞き手が自分のことばに対して何らかの「答え」や「反応」をするだろうと予期して、その答えや反応を見るために聞き手を見ようとする》(142)

* (志向性・予期の) 中和化～《その予期に関連した自分の行為そのものを、自分にとっては存在しないものに変えた》(178) →「やりすぎ」：つぎの両方の違反を逃れる同意→「自分で自分のことをほめてはいけない」という規範に違反
否定→相手の評価を顧慮していることを示すべきであるという規範に違反

* これらは興味深いですが、聞き手を巻き込む評価的な発言一般の分析、にはかならない？

□ 結論として

* エスノメソドロジー・会話分析は、“局域”における現象（会話）を実証的に扱う方法論をもっている。この実証法のコスト（労力）の大きさが、参入障壁になっている。

* “局域”は、時間・空間的に限定されているため、その背後に社会の全域を想定する。“局域”を構成する諸要素（規範、カテゴリー、言葉、……）は、全域で通用する変数。

* 《カテゴリーがある場面において局域的にいかんして構成されるかを探る》(20)戦略が提案されているが、カテゴリーは局域で「再生産」されるとしても「構成」はされないだろう。局域がそのような特権的な場所であるとは考えにくい。

* 局域から出発するなら、局域を“積分”する方法を持たないと、全域で通用する変数の値を理論的に説明できないのではないかと？

* 逆に言うと、全域で通用する変数を前提にしたかたちで局域の理論を構成するなら、それは本質的に、参与者の知識（当人たちの意図）と同じ内実のものとなる。

1995-11-③/18

創作学校・創作科No.13

於：渋谷フォーラム 8

言語ゲームと言説戦略

1995. 2. 8

橋爪大三郎

講師紹介…はしづめ だいさぶろう 1948年生まれ。社会学専攻。

東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授。

著書…『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればいいのか』『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』（勁草書房）『はじめての構造主義』『社会がわかる本』（講談社）『自分を活かす思想/社会を生きる思想』『小室直樹の学問と思想』（径書房）『崔健』『性愛論』（岩波書店）ほか。

□1□ 言葉は、社会的文脈のなかにある

1) 社会的文脈 social context : 誰が、誰に、いつ、何を、なぜ、どのように言うか?

* 社会的文脈は、ふつう（完全には）意識されない。

* 社会的文脈を明確に取り出すのはむずかしい。 ∴ 文脈を取り出すには発話が必要

2) 言葉の効果（受け手に何を及ぼしたか）は、社会的文脈とともに確定する。

* 話し手（書き手）は、「正しい」言葉や「よい」言葉以前に、「適切な」（＝社会的文脈に適合した）言葉を生み出す必要がある。 適切性～意味作用の水準とは別レベル

* 言葉の「用法」……社会的文脈を熟知したうえで、言葉を使いこなすこと。

ヴィトゲンシュタイン（20世紀半ば、イギリスで活躍した哲学者）は、言葉の意味とその用法に注目するところから、言語ゲーム language game のアイデアを手にした。

3) 言葉は、社会的文脈を構成する。（言葉⇄その文脈～循環性）

* 言葉は、ほかの言葉の社会的文脈に数えられる。⇒言葉は、社会的現実を構成する。

* 言葉の創造力（生産力）は、現実世界を生みだし、人間の精神世界を構成する点にある。言葉の流通を支配するものは、現実世界を（意味的に）支配し、人間を支配する。

□2□ 言葉の伝わりやすさ/言葉のセンセーションリズム

4) 難文体～平明体～じゃないか体（言文一致体）（●資料「じゃないか体」だって…）

* 難文体の特徴：①複文（修飾節）の多用、②抽象名詞の多用、③文語体の多用

⇒平明体の特徴：①単文（接続詞）の多用、②動詞句の多用、③口語体の多用

* なぜひとは難文体を書いてしまうのか？

i) 思考が未熟・未整理なため、ii) 翻訳したため、iii) ほかの文体を知らないため、iv) そのほうが偉そう・賢そうに見えるため、v) 内容の破綻をごまかすため、……

* 理由の i) によれば、難文体は思考に負担をかけない。iv)、v) によれば、書き手の精神衛生にもいい。（はた迷惑だという点で、難文体は「公害」である。）

5) 言葉のセンセーションリズム（●資料「無条件降服！」）

* どんな言葉にも、感情的な価値がこめられている。

価値プラス（好感）——価値ニュートラル——価値マイナス（反感）

意図して価値を中立に保たないかぎり、価値ニュートラルな文章は書けない。

* 読者の感情に訴えて「共感の輪」をこしらえるタイプの文章は、伝わりやすい。

⇒しかし、この種の「共感の輪」は、事実を無視し、現実から遊離する傾向がある。

cf. 山本七平『空気の研究』文藝春秋

* 伝わりやすさを犠牲にしても、書くべきことを書き、書くべきでないことを書かない！

□3□ 事実/意見の区別（⇄『橋爪大三郎コレクションⅢ・制度論』）

6) キリスト教の根本規範……“その言葉は、神からのものか、人からのものか？”

* 事実～神がその生起を管轄する、人はそれを否定できない。

「意見～人からのもの。事実・真理の「像」（事実・真理との一致は保証されない）。

* キリスト教（一神教）は、価値を神に集中したため、それ以外のものは無価値になる。

⇒即物主義、機械的因果論、言説倫理（“偽証の罪”ほか）、理性、個性、……

7) 情報をめぐる言説戦略

* 情報：事実について、人から伝えられる知識 事実?? → 証人 → 個人
情報は、事実に関する証言のかたちでもたらされる 目撃 証言

* 事実について知ろうとする個人は、情報の連鎖の終点に位置することになる。

証人たちの報告は一般に一致しない ⇒ 個人は事実が何かを“決定”するほかない

⇒ その個人の証言は、別の個人にとって意見となる（真理の分権システム）

□4□ 言説戦略とその効果

8) 言語ゲームは、その前提を「実体化」する（⇄『仏教の言説戦略』）

* 言語ゲームは、あることがらを前提にしたふるまいである。

例) 明日も太陽が出る、他人は存在する、約束はだいたい守られる、……

cf) すべてを疑うことはできない（∴ 疑いもまたひとつのゲーム）。 ∴ 人は何かを前提する。

* ある言語ゲームが遂行されていると、その言語ゲームのなかでは、その前提は疑えない。

⇒ ゲームは、前提を実体化する（ゲームの効果）。例) 前提＝神、霊魂、真理、……

9) 言説戦略は、現実（意味ある世界）を構成する

* 宗教：日常的には自明でないことがらを前提としてふるまうこと。

ある角度から見れば、科学もまた宗教である。（違い～科学はその前提＝仮説を疑う）

* 宗教も、また科学も、特有の言説編成原理（＝言説戦略）を持っている。

・仏教の言説戦略～“悟り”を尋ねあう言語ゲーム 戒律

・キリスト教の言説戦略～契約を更改する言語ゲーム（愛のゲーム） ←ユダヤ教

・科学の言説戦略～仮説を検証する言語ゲーム 現象の抽象と制御

* これらの言説戦略は、全体的な現実（世界）を構成する。

それは、時間-空間構造をそなえていて、人びとの生涯をそのなかに位置づける（意味的に支配する）。

言語研究会合宿 コメント：木畑寿信 1995 1995.3.11/12
 於：八王子SH 『社会理論の「言語ゲーム」論的基礎に関する研究』 橋爪大三郎
 ——言語ゲームとしての権力論・序説——

□1□ 目次(抄)

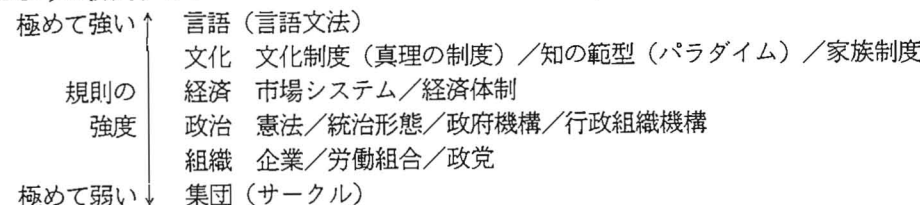
序章 課題と方針	第3節 エクリチュールの痕跡としての言語記号
第1節 研究の課題と方法	第4節 エクリチュールの《自己準拠システム》
第2節 研究の構成	第5節 《複合言語ゲーム》と《規則》
第I章 前期ウィトゲンシュタインの言語理論	第6節 《権力》の《強度》★
第II章 ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」論	第7節 《権力》と《自己準拠システム》
第1節 読解の対象	第IV章 《言語ゲームとしての社会理論》の基礎論
第2節 離脱の困難と「問い」	第V章 《言語ゲームとしての社会理論》の展望
第3節 《写像理論》の自己解体	第1節 社会理論の問題状況
第4節 「懐疑的問題」に対する「懐疑的解決」としての《社会的存在論》	第2節 《思考すべき問題圏》と《関与的問題》
第5節 《闘争》としての《遂行的な事態》	第3節 社会の《想像的=創造的》な関係★
第6節 《規則に従うこと》	第1項 《社会主義=自治》社会の《自己創出》
第7節 《意味を説明すること》	第2項 《言説的実践》
第8節 《強度》★	第3項 《編成様式》としての政治的集団
第9節 《時間》と《形態》	★……コメントで特に取り上げる部分
第III章 「言語ゲーム」論の《理論装置》：基礎的諸概念と系	
第1節 批判的検討と理論的拡張	
第2節 《視点の二重性》と言語理論の《対象》	

□2□ 規則の《強度》は権力か？

- 副題にあるように、この論文が「権力論・序説」であるなら、この論文のどこかに、権力についての概念規定がなければならない。木畑氏は、それを、言語ゲームとの関連で定義する。
- 第II章第8節「《強度》」において、木畑氏はつぎのように言う：
 - 経験命題の集合には、《強度》が存在しており、それらの集合が経験命題の体系(システム)を形成する程度の《強度》を持つことによって、それらの集合は凝固して、《世界像》を構成することが可能になる。
 - 経験命題の集合が体系(システム)を形成する程度の《強度》を持つことができなくなると、それらの集合は流動化して、《世界像》を構成することが不可能になる。
- 《強度》という考え方は、ウィトゲンシュタインがぼんやりとしかのべていなかったものを、木畑氏が強調して取り出したものである。
- 第III章第6節「《権力》の《強度》」において、木畑氏はつぎのように言う：
 - 言語ゲームの《規則》には《強度》が存在している。
 - 言語ゲームの《規則》の《強度》は、《規則》の変更可能性の程度を表現する。言語ゲームの規則の《強度》の存在を明らかにすることによって、言語ゲームに作用し

ている《権力》の《強度》を表現できる。つまり、言語ゲームにおける<規則の強度の強弱>と言語ゲームに作用している<権力の強度の強弱>とは対応する。

5) 同じ第III章第6節で、木畑氏は続けて、規則の強度に従って、社会規範の類型をつぎのように排列する：



この区分の根拠は、《自由意志》による変更の可能性である。

6) こうした議論は、権力に対する古典的な見方、すなわち、権力は個々人の自由意志を否定したり抑圧したりする、という見方によっている。しかし、この見方が仮に正しかったとしても、著者が主張しているのはその逆、すなわち、個々人の自由意志によって恣意的に変更できないものが権力である、だ。このこと(逆の正しさ)は、どこで正当化されているのか？

7) 前回の合宿時の報告でも議論になったが、政治に比べ、文化や言語のほうが権力の度合いが強いというのは、奇妙な結論であり、これまでの社会科学の理解と接合が悪い。

□3□ 《言語ゲームとしての社会理論》はどのように評価できるか

- 木畑氏は言う：《言語ゲームとしての社会理論》は、「言語ゲーム」論の《理論装置》を基礎として構想された社会理論である。(第III章第2節)
- 木畑氏は、社会理論の問題状況を突破するため、《古典マルクス主義の社会理論》と《構造主義の社会理論》とを、批判的に検討する。
- さらに木畑氏は、言語ゲームは歴史的な実在概念であると同時に、方法的な操作概念であると言い、後期資本制社会においては、社会構成体の内部で作用する権力は、言語ゲームの巨大な集積として現れるとする。しかし言語ゲームは、商品がそうであったような意味での、歴史的な実在概念であろうか？
- 第IV章第3節第1項「《社会主義=自治》社会の《自己創出》」で、木畑氏はこうのべる：

《言語ゲームとしての社会理論》は、社会の構想を、……大衆の生活世界を存在与件とした、《社会主義=自治》社会の《自己創出》の問題へと置き換える。
- さらに第3項「《編成様式》としての政治的集団」において、こうのべる：

政治的集団を、社会主義=自治社会の構想を現実化するイデオロギー装置としての役割を担う《言説的諸実践》として規定する。……社会主義=自治社会の構想の担い手は、《多数多様体》であり、そのひとつとして、政治的集団が存在する……。政治的集団の活動……の基本原則……は、《民主主義的な政治》という概念である。

そのあと木畑氏は、自主管理型の企業や分権的な政治的集団について、いくつかの具体的イメージを提出するが、そのイメージは、これまでヨーロッパ・マルクス主義が提出してきたものと大きく異ならない。
- 木畑氏は民主主義を、自由と平等によって性格づけている。自由と平等←→支配と抑圧、という対比は、伝統的なものである。ところで、個々人の自由を保障するには、他者がそれを侵害しない(個々人の恣意にならない)規則の存在が前提となる。木畑氏の枠組みで言うと、これは強力な権力ということになる。すると、もっとも民主主義的な社会はもっとも強力な権力をそなえた社会ということになる(これはこれで正しい、ひとつの結論かもしれない)が、木畑氏はそうした結論を肯んずるのであるか？
- 基礎論の内容が、展望にどう結びついているのか、わかりにくい印象をもった。

1995-11-⑤/18

トポスの会・レジュメ
於：東大・山上会議所

ニッポンはどこへ行く？
95年現象を読む

1995. 6. 10
橋爪大三郎
(東工大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。開成中学・高校(西沢光義氏と同窓)→東大文学部社会学科・大学院社会学研究科修了
1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年に大学院社会理工学研究科VALDES専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(近刊・幻冬社)、『橋爪大三郎の社会学講義』(近刊・夏目書房)。

□1□ 95年現象とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があらわになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類：①洗脳、マインド・コントロール、カルト教団、……～犯罪論的文体；②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世代的論的文体；③理工系人間、親子の断絶、……～社会的文体；など。
しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは？
- 3) 95年現象の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象？

□2□ 近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法 ・出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
・国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
・「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
・自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
・過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟

- ・科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教～神道と習合 儒学～心情道徳に変貌
・宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物
- 5) 資本主義 ・「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
・官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育 ・「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
・エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺
- 7) 政治 ・選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
- 8) メディア ・報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
・商業化、情報化と拮抗する価値観なし

□3□ 国家の再構築、国家目標の再発見 ⇒日本の再定義へ

- 1) オウム教団の基本モチーフ
 - * 出家修行……現存の社会秩序への、強固な嫌悪・否定の感情
 - * 省庁制……国家への意志 ①アメリカと絶縁(ロシア正教的神政政治)
②使命(超越的価値・原理)にもとづく国家の再発見
今回の事件が、人びとに深い衝撃を与えたのは、こうした無意識に働きかけたから？
- 2) 政治改革の難航
 - * 中選挙区制→小選挙区制 : 脱55年体制の器づくり 器はできたが、政治の実質は？
 - * 新進党の失敗 有権者の「選択」を優先しないで、政党の数合わせを先にした
 - * 国民を指導する(複数の)明瞭・簡潔な政治哲学(+リーダー) ⇒政党へ
- 3) 日本の再定義へ
 - * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
ナイーヴなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)
 - * ポスト戦後日本は、「戦前的なもの」への復帰なのか
“日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
日本の与件: 位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
日本の条件: 産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標: 世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す ×単純な利他主義
- 4) VALDES (社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
 - * VALDES : The Advanced Program for Values and Decision Science
入試: 哲学+数学 加数学: 文系+数学 + 理系+数学 人材: 最高意思決定に参画
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く) → 国家の再構築へ

☆VALDES入試(第一回: 7月上旬締切)の問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室へ

日本鉄鋼連盟管理者セミナー 講義⑤ 文化・教養部門 1995. 8. 25
 於：NKK経営研修所/鶴見 日本の明日を考える 橋爪大三郎
 95年危機を越えて (東工大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年4月より、大学院社会理工学研究科VALDES専攻新設予定。
 著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(近刊・夏目書房)。

□1□ 95年危機とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があらわになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類：①洗脳、マインド・コントロール、カルト教団、……～犯罪論的文体；②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世代論的文体；③理工系人間、親子の断絶、……～社会学的文体；など。
 しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは？
- 3) 95年現象の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象？

□2□ 95年危機の診断学 ～近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法 ・ 出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
 ・ 国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
 ・ 「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・ 過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
 ・ 自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
 ・ 過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・ 「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
 ・ 科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教～神道と習合 儒学～心情道徳に変貌
 ・ 宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物

- 5) 資本主義 ・ 「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
 ・ 官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育 ・ 「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
 ・ エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺
- 7) 政治 ・ 政治：関係する人びとを拘束する意思決定を行なうこと 政治=意思決定
 ・ 選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
- 8) メディア ・ 報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
 ・ バラエティ：テレビ局で面白いことが起こる → 視聴率優先～価値相対主義
 ・ ヒューマンイズム(オウム=悪)と相対主義(反論も可)の共存 → 更なる頹廢

□3□ 国家の再構築、国家目標の再発見 ⇒ 日本の再定義へ

- 1) オウム教団の基本モチーフ
 - * 出家修行……現存の社会秩序への、強固な嫌悪・否定の感情
 - * 省庁制……国家への意志 ①アメリカと絶縁(ロシア正教的神政政治)
 ②使命(超越的価値・原理)にもとづく国家の再発見
 今回の事件が、人びとに深い衝撃を与えたのは、こうした無意識に働きかけたから？
 - * 宗教：現実に対してもうひとつの現実を対置することで、人びとを軛から解き放つ
- 2) 政治改革の難航
 - * 中選挙区制→小選挙区制：脱55年体制の器づくり 器はできたが、政治の実質は？
 - * 新進党の失敗 有権者の「選択」を優先しないで、政党の数合わせを先にした
 - * 国民を指導する(複数の)明瞭・簡潔な政治哲学(+リーダー) ⇒ 政党へ
- 3) 日本の再定義へ
 - * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
 ナイヴなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
 戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)
 - * ポスト戦後日本は、「戦前的なもの」への復帰なのか
 “日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
 日本の与件：位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
 日本の条件：産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標：世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す × 単純な利他主義
- 4) VALDES (社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
 - * VALDES : The Advanced Program for Values and Decision Science
 入試：哲学+数学 カキタム：文系+カギム + 理系+カギム 人材：最高意思決定に参画
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く) → 国家の再構築へ

☆VALDES入試のお問い合わせは、橋爪大三郎研究室(☎ 03-5734-2667)まで

1995-11-18

本田技研労組埼玉支部講演 21世紀社会を 1995.9.8
於：和光市民文化センター 展望する 橋爪大三郎
——95年危機を越えて—— (東工大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程
修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。1996年
4月より、大学院社会理工学研究科VALDES専攻新設予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えれば
よいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての
構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書
店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会
を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大
問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(近刊・夏目書房)。

□1□ 95年危機とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があら
わになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件の本質
 - * 日本社会が、冷戦の図式に順応するのみで、みずからの現実(時間軸~歴史、空間
軸~国際性)を構築するのを怠ってきた → 「もうひとつの現実」の増殖
(参考:「われわれにとって「オウム事件」とは何か」『サンサーラ』10月号)
- 3) 95年危機の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象?

□2□ 95年危機の診断学 ~近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法
 - ・ 出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
 - ・ 国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
 - ・ 「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史
 - ・ 過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
 - ・ 自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
 - ・ 過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学
 - ・ 「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
 - ・ 科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した

- 4) 宗教
 - ・ ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教~神道と習合 儒学~心情道徳に変貌
 - ・ 宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物になり下がっていた
- 5) 資本主義
 - ・ 「資本家」の不在 ex. 個人保証 利潤追求は「努力目標」!?
 - ・ 官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育
 - ・ 「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
 - ・ エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺
- 7) 政治
 - ・ 政治: 関係する人びとを拘束する意思決定を行なうこと 政治=意思決定
 - ・ 選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
- 8) メディア
 - ・ 報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
 - ・ バラエティ~テレビ局で面白いことが起こる → 視聴率優先~価値相対主義
 - ・ ヒューマンイズム(オウム=悪)と相対主義(反論も可)の共存 → 更なる頹廃

□3□ 21世紀社会を展望する——国家の再構築、国家目標の再発見

- 1) ポスト冷戦社会の本質……世界市場の登場 植民地→ブロック化→冷戦→世界市場
 - * 国際分業のやり直し 「比較優位の原則」による産業の再配置+資本・技術の移転
 - * 南北対立の激化 人口危機(2050年 100億)+食糧危機+エネルギー危機
 - * 地球環境問題 化石燃料(石炭)依存→炭酸ガス(温室効果)→地球温暖化
 - * 新しい国際秩序 アメリカの相対的弱体化/中国の台頭/オウム型国家・ゲリラ多発
- 2) 日本の再定義へ
 - * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
ナイーヴなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)
 - * ポスト「戦後日本」は、「戦前的なもの」への復帰なのか
“日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
日本の与件: 位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
日本の条件: 産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標: 世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す ×単純な利他主義
- 3) 日本改造……前項1)~8)の制度改革 問題は、その主体をどうつくり出す?
- 4) VALDES(社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
 - * VALDES: The Advanced Program for Values and Decision Science
入試: 哲学+数学 カリキュラム: 文系プログラム+理系プログラム 人材: 最高意思決定に参画
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く)→国家の再構築へ

☆東工大VALDES入試等のお問い合わせは、橋爪大三郎研究室(☎ 03-5734-2667)まで

大阪女学院中学
・高等学校講演

学校はどんな社会の器か？

1995. 10. 11
橋爪大三郎
(東京工業大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学人文社会群に勤務。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)ほか。

□1□ 教育をめぐる思想

1) 一神教は、教育をどう考えるか

- * ユダヤ教……世界で最初に義務教育の考え方を採用(シナゴグ)~パリサイ派
∴祭司階級を否定、一般民衆が『聖典』を読み、そのリーダー(知識人)が指導者に。
- * イスラム教……世界で最初に大学を設立 『コーラン』を根拠に、法学体系を完成
『コーラン』&法学に通じた知識人(法学者)が指導者に。
- * キリスト教……反主知主義の要素あり ∴宗教法でなく、キリストに依拠して救済へ。
(キリスト教には「キリスト法」なし。) キリスト教徒は聖書を読む必要がなかった。
⇒宗教改革で、やっと「聖書中心主義」が登場。

宗教法が不在である結果、かえって「科学」が発展できた。→科学が教育の柱に。

- * 一神教は基本的に、神を絶対視する。その結果、教育の機能を限定する。cf. 「天才」

2) 儒教は、教育をどう考えるか

- * 儒教=差別道徳 人間関係(血縁関係、社会関係)が確定して、行動様式が決定する。
- * 教育の基本は親子関係(父→子) : ①過去が現在の基準、②人間が価値の基準
⇒聖人(過去の極限にいる基準となる人間=政治家)が、「聖典」の源泉になる。
- * すべての人間は、教育によってどこまでも向上する(儒教のドグマ)。⇒教育によって向上しない(できない)のは本人が悪い。⇒教育の有無で人間を差別 cf. 君子/小人

3) 日本人は、教育をどう考えてきたか

- * 江戸時代の寺子屋(儒教がベースだが中途半端)の伝統に、科学教育をミックス。
- * 学校は文部省が設置するもの(教育は国がやるもの)という思い込み。←→親の教育権
- * 階層のなくなった近代日本では、教育は「階層構成原理」として働く
差別はいけない⇒差別には理由が必要→“試験にパスした”“学歴が違う”と正当化

□2□ 学校はいつから変になったか

- 1) 学校格差が形成されるメカニズム: 生徒は平等(人格と学力の未分化)~成績による差をつけたくない~差があるのは教育の失敗・差別肯定 ⇒学力の同じ生徒を集めれば、その心配なし ⇒生徒個人間の格差よりも学校間格差のほうが社会的に是認される~生徒は所属学校で評価される ⇒学校の階層形成機能がはたらく~受験が激化
- 2) 受験の変質 進学率の上昇→一部の者に教育機会を分配する制度から、多くの者から教育機会(就職機会)を奪う制度に変質(抑圧的!)→勉学動機の消失

- * 偏差値万能 ←学校定員の厳守+受験成績により合格決定+学校の階層形成機能
- * 学校の教育機能喪失 受験学力は、塾・予備校が養成 進路指導も塾・予備校優位
- 3) 現代いじめのメカニズム 人格と学力の未分化 ⇒落ちこぼれ児童(ほとんど誰でもそうだ)の疎外感(トラウマ) ⇒学校の公認の場では癒されない ⇒隠れた祝祭空間を共謀して全能感を回復(←→みんな仲良く) ⇒学校~偽善/いじめ~真実、という形の自己肯定(美学化)、いじめを悪いと思わない生徒の増加(いじめられる側にも原因が・論) ⇒いじめられる側の、祝祭空間への同化(いじめに見えないいじめ)
- * 消費社会のメディア状況(面白ければ何でも許される)が、祝祭のなかでなぞられる

□3□ 学校はどういう社会の器か

1) 校則とは何か

- * あるミッション系インターナショナル・スクール(中学)の例
RULES FOR A HAPPY MIDDLE SCHOOL so that our Middle School is a place where everyone is happy to learn in, WE ALL MUST: 特徴~①市民社会と同じ規則

 1. RESPECT THE RIGHTS AND PROPERTY OF OTHERS. ②教育は機会である
 2. NEVER KEEP SOMEONE ELSE FROM LEARNING. ③教師と生徒の区別なし
 3. NEVER SAY OR WRITE ANYTHING TO HURT SOMEONE. ④単純・明快・体系的

- * 多くの日本の中学・高校の校則 ⑤根拠が明示されている
校則は、教師から生徒にあてた命令(行政指導)であって、管理の手段(生徒=雑音)
⇒校則が多ければ多いほど、管理しやすい(生徒はよくなる) ⇒校則インフレ
- * 自由(=権利)を学ぶためには制限(規則)が必要……校則の教育的意義
“校則が守られている状態”よりも、“校則がなぜ守られなければならないかを違反者が理解するプロセス”こそ、校則の教育効果があらわれる。

2) 学校選択の時代

- * 生徒減少 ⇒底辺校の倒産、中位校のランク落ち(教師の社会的威信も偏差値と連動)
- * 各校の生き残り戦略 ①受験学力を強化、②付加価値(しつけ、英語、制服など)を強化、③他校の脱落を待つ、……。 上位校ほど、生徒の自主性をあてにでき、自由な校風に特化しやすい/中位校は厳しいしつけ、下位校はあの手この手で特化に懸命

3) 本当の学校競争力は、教育機能を回復するところにしか生まれない

- * 自由な校風が上位校で成り立つのは、全員に学力の優位を認める余地があるから。
⇒学力と人格(確固たる教育方針・価値観)が分離できれば、どの学校でも可能。
⇒むしろ両者が分離したほうが、学力を伸ばすための教育がよくなる(塾をみよ)。
- * 女子校の利点 社会の差別実態(男>女)を教育に持ち込まないために、女子校は女子の能力を存分に(男性に気兼ねなく)開花させる条件を整えられる。
- * 受験学力以外の、教育機能強化
 - ・本物進路指導 脱偏差値指導~大学の情報提供~OGアンケート
 - ・本物人生指南 学校でいま「幸せな人生を送るために」何をするか
職業/結婚/家事育児/老後/保険/経済/政治/留学…… ~OG講師の日
- * 学校が「階層形成機能」を果たす時代は終わりつつある。「階層形成機能」の重荷を背負いつつ、教育の中身を充実させていくことが、将来につながるのではないか

1995-11-⑨/18

工大祭～東工大岡山
キャンパス W241教室

どこへ行く、ニッポン?!

95年現象を読む

1995.10.14
橋爪大三郎
(東工大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月に大学院社会理工学研究科VALDES専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬社)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研、近刊)ほか。

□1□ 95年現象とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があらわになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類: ①洗脳、マインド・コントロール、カルト教団、……～犯罪論的文体; ②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世代論的文体; ③理工系人間、親子の断絶、……～社会学的文体; など。
しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは?
- 3) 95年現象(=危機)の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象?

□2□ 近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法 ・出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
 - ・国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
 - ・「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
 - ・自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
 - ・過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
 - ・科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教～神道と習合 儒学～心情道徳に変貌
 - ・宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物

- 5) 資本主義 ・「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
 - ・官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育 ・「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
 - ・エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺
- 7) 政治 ・選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
- 8) メディア ・報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
 - ・商業化、情報化と拮抗する価値観なし 「面白ければいい」～価値相対主義

□3□ 国家の再構築、国家目標の再発見 ⇒日本の再定義へ

- 1) オウム教団の基本モチーフ
 - * 出家修行……現存の社会秩序への、強固な嫌悪・否定の感情
 - * 省庁制……国家への意志 ①アメリカと絶縁(ロシア正教的神政政治) ②使命(超越的価値・原理)にもとづく国家の再発見
今回の事件が、人びとに深い衝撃を与えたのは、こうした無意識に働きかけたから?
 - * 宗教法人法の改正……当然のこと(経理の公開) 破防法の適用……必要なし
- 2) 政治改革の難航
 - * 中選挙区制→小選挙区制 : 脱55年体制の器づくり 器はできたが、政治の実質は?
 - * 新進党の失敗 有権者の「選択」を優先しないで、政党の数合わせを先にした
 - * 国民を指導する(複数の)明瞭・簡潔な政治哲学(+リーダー) ⇒政党へ
- 3) 日本の再定義へ (詳しくは近刊『新生日本』を参照のこと)
 - * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義) ナイヴなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)
 - * ポスト戦後日本は、「戦前的なもの」への復帰なのか
“日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
日本の与件: 位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
日本の条件: 産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標: 世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す ×単純な利他主義
- 4) VALDES(社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
 - * VALDES: The Advanced Program for Values and Decision Science
入試: 哲学+数学 カリキュラム: 文系プログラム + 理系プログラム 人材: 最高意思決定に参画
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く) → 国家の再構築へ

☆VALDESに入学を希望する方は……

「説明会」を今後月1～2回ずつ実施する予定ですので、まず説明会においで下さい。
日程そのほか、具体的な問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。

1995-11-10/18

第11回蔵前スクール オウム真理教はなぜ 1995. 10. 18
於：蔵前工業会館 若者をひきつけたか 橋爪大三郎
社会学

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程
修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月、
社会理工学研究科価値システム(VALDES)専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えれば
よいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての
構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書
店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会
を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大
問題!』(幻冬社)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を
救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研、近刊)ほか。

□1□ オウム・サリン事件の衝撃

- 1) 95年危機の到来……阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 →日本社会
の構造的弱点があらわになった。(戦後50年目+冷戦崩壊から5年目)
(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類：①洗脳、マインド・コントロール、カル
ト教団、……～犯罪論的文体；②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世
代論的文体；③理工系人間、親子の断絶、……～社会学的文体；など。
しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは？

□2□ オウム真理教の謎に迫る

- 1) 仏教系出家教団としてのオウム (⇔『仏教の言説戦略』)
・南伝パーリ語仏典→阿含宗→オウム神仙の会→ 北伝大乘諸宗と別系統(矛盾なし)
・仏教徒であるための必要十分条件：三帰依(仏法僧) 出家の必要十分条件：具足戒
⇔オウムの出家は、ヒンドゥー教的・ラマ教的な「グルへの帰依」が基本
・釈迦の覚り(無上正等覚)と麻原彰晃の「最終解脱」との関係? ~“ほぼ同じ”
・オウムの出家：①個人財産の布施、②世俗の職業を退職、③教団の指揮系統に入る。
- 2) 終末論的カルト教団としてのオウム
・「ハルマゲドン」信仰 原始仏典の解釈～聖書解釈～ノストラダムス予言 mix
・80年代サブカルチャー(中沢新一『チベットのモーツァルト』、AKIRA、……)
・人民寺院、ブランチャ・ダビディアン、太陽教団、…… ロシア布教～ロシア正教
- 3) 陰謀集団としてのオウム
・ディズニーランド教団(by島田裕巳)：なんでもありの、「ノリ」で楽しむ教団
・社会の現実に対して、もうひとつの現実を対置&もうひとつの現実へのめりこむ
cf. いじめ：破壊された自己(被害感)を加害のなかで回復～全能感～利己的遊戯
・社会との敵対は必然 オウム型布施(人と金の収奪) 組織拡大への圧力
・金剛乗(ガジヤナ)……秘密の任務～犯罪～修行の完成度の高さの証明～同志的結束

□3□ 若者はなぜオウム真理教に惹きつけられたか

- 1) オウム教団の基本モチーフ
・真理……価値相対主義(ポスト・モダン)の反対物 アナクロニズム

- ・出家修行……現存の社会秩序への、強烈な嫌悪・否定の感情(⇔戦後民主主義)
- ・階層制……受験的な上昇パターンへのこだわり 覚りの予備校 超能力=速度
- ・セル(小部屋)&区画への志向……個室(勉強部屋)の妄想の延長 つきあい下手
- ・省庁制……国家への意志 ①アメリカと絶縁(ロシア正教的神政政治)
②使命(超越的価値・原理)にもとづく国家の再発見

今回の事件が人びとに深い衝撃を与えたのは、人びとの無意識に働きかけたから？

2) オウム教団の超官僚制

- ・根源的身体性～暴力性 受験・管理教育のなかの自我の危機～麻原の怪物性
- ・同好サークル→グルへの絶対帰依→拡大ゲーム(階層性)→忠誠ゲーム(犯罪と権力)
戒律が明示されない 「教団(麻原)の指示」が戒律に転化
- ・反価値(犯罪)の価値への転化 ポアのロジック cf. ヤクザ社会の前科
官僚制(人格と分離した組織・職務への忠誠)の未発達 サリン実行犯は皆幹部

3) オウム事件の波紋

- ・宗教法人オウムの解散……教団の違法行為が組織的だったと証明された時点で可能
- ・宗教法人法の改正……これを機会に、現行法の改正が適当(特に、経理の公開)
- ・破防法の適用……必要なし ∴刑法の原則～罪刑法定主義 行為責任(思想信条・結
社の自由) 予防法(公安のための特例)～①危険が実在、②国家機能への攻撃

4) オウムの事件は再発するか

- ・学習効果 似たような事件には騙されない 反社会テロは、左翼以外にも可能
- ・欧米ではカルト教団が多発 「もうひとつの現実」に惹かれる人びとは常にいる
- ・戦後日本社会の薄弱な現実感覚 マス・メディアの増幅する仮想現実
時間感覚：歴史の欠如 自分を過去/未来からみる視点を想定できない
空間感覚：国際性の欠如 日本以外の行動パターンや価値原則を想像できない
⇒オウムそっくりでなくても、類似の原因による事件は不可避である

5) VALDES(社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)

- ・日本社会に、まっとうな現実感覚を回復するために
政治の復権 社会リーダーの養成 価値前提→数理解析→意思決定
- ・VALDES: The Advanced Program for Values and Decision Science
入試：哲学+数学 カキタム：文系プログラム+理系プログラム 人材：最高意思決定に参画
- ・それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く)→国家の再構築へ

☆VALDESに入学を希望する方は……

「説明会」を今後月1～2回ずつ実施する予定ですので、まず説明会において下さい。
日程そのほか、具体的な問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。

□参考文献□

- ・「オウム真理教はなぜ最終戦争を覚悟したのか」『月刊論座』1995年6月→社会学講義
- ・「オウム真理教はいかに陰謀集団に変質したか」『宝島30』1995年5月→社会学講義
- ・「われらにとってオウム事件とはなにか」『サンサーラ』1995年10月号
- ・「オウム真理教と犯罪」(朝倉喬司氏との対談)朝日新聞1995.6.5/6
→『なにがオウムを生み出したのか』朝日新聞社
- ・「オウム事件とは何だったのか」(中沢新一・山崎哲・布施英利氏との座談)『広告批
評』1995年6月号
- ・「トークバトル」(小林よしのり氏との対談)『大問題!』pp.141-171
- ・『近代国家とオウム(仮題)』(呉智英氏らとの共著・南風書房・近刊)

1995-11-11/18

蔵前金曜会午餐会
於：蔵前工業会館

どこへ行く、ニッポン!!
95年現象を読む

1995. 10. 20
橋爪大三郎
(社会学)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程
修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月、
社会理工学研究科価値システム(VALDES)専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えれば
よいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての
構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書
店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会
を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大
問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を
救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研、近刊)ほか。

□1□ 95年現象とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があら
わになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類：①洗脳、マインド・コントロール、カル
ト教団、……～犯罪論的文体；②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世
代論的文体；③理工系人間、親子の断絶、……～社会学的文体；など。
しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは？
- 3) 95年現象(=危機)の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象？

□2□ 近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法 ・ 出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
 - ・ 国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
 - ・ 「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・ 過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
 - ・ 自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
 - ・ 過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・ 「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
 - ・ 科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教～神道と習合 儒学～心情道徳に変貌
 - ・ 宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物
- 5) 資本主義 ・ 「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
 - ・ 官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育 ・ 「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
 - ・ エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺

- 7) 政治 ・ 選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
 - 8) メディア ・ 報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
 - ・ 商業化、情報化と拮抗する価値観なし 「面白ければいい」～価値相対主義
- ☆これらに共通する特徴……普遍性をもった言葉を操るのが苦手である

□3□ 国家の再構築、国家目標の再発見 ⇒日本の再定義へ

- 1) オウム教団の基本モチーフ
 - * 真理………価値相対主義(ポスト・モダン)の反対物 アナクロニズム
 - * 出家修行………現存の社会秩序への、強烈的嫌悪・否定の感情(←戦後民主主義)
 - * 階層制………受動的な上昇パターンへのこだわり 覚りの予備校 超能力=速度
 - * セル(小部屋)&区画への志向………個室(勉強部屋)の妄想の延長 つきあい下手
 - * 省庁制………国家への意志 ①アメリカと絶縁(ロシア正教的神政政治)
②使命(超越的価値・原理)にもとづく国家の再発見

☆今回の事件が人びとに深い衝撃を与えたのは、人びとの無意識に動きかけたから？

- * 宗教法人法の改正………当然のこと(経理の公開) 破防法の適用………必要なし

2) 政治改革の難航

- * 中選挙区制→小選挙区制 : 脱55年体制の器づくり 器はできたが、政治の実質は？
- * 新進党の失敗 有権者の「選択」を優先しないで、政党の数合わせを先にした
- * 国民を指導する(複数の)明瞭・簡潔な政治哲学(+リーダー) ⇒政党へ

3) 日本の再定義へ (詳しくは近刊『新生日本』を参照のこと)

- * 戦後日本社会の薄弱な現実感覚 マス・メディアの増幅する仮想現実
 - 時間感覚: 歴史の欠如 自分を過去/未来からみる視点を想定できない
 - 空間感覚: 国際性欠如 日本人以外の行動パターンや価値原則を想像できない
- ⇒オウムそっくりでなくても、類似の原因による事件は不可避である

- * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
ナイーブなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)

- * ポスト戦後日本は、「戦前的なもの」への復帰なのか
“日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
日本の与件: 位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
日本の条件: 産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
- * 国家目標: 世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す ×単純な利他主義

4) VALDES (社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)

- * 日本社会に、まっとうな現実感覚を回復するために
政治の復権 社会リーダーの養成 価値前提→数理解析→意思決定
- * VALDES : The Advanced Program for Values and Decision Science
入試: 哲学+数学 カキタム+文系プログラム+理系プログラム 人材: 最高意思決定に参画
- * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く) → 国家の再構築へ

☆VALDESに入学を希望する方は……

「説明会」を今後月1～2回ずつ実施する予定ですので、まず説明会において下さい。
日程そのほか、具体的な問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。

1995-11-12/18

95社会同和教育講座①
於：品川社会教育センター
(品川区教育委員会)

ひとはなぜ、
ひとを差別するか

1995. 10. 25
橋爪大三郎
(東京工業大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程
修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月、
社会理工学研究科価値システム(VALDES)専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えれば
よいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての
構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書
店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会
を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大
問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を
救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研、近刊)ほか。

□1□ 区別と差別は、どのように生まれてくるか

1) われわれの体験する世界は、さまざまな区別のうえに成り立っている。

* 20世紀の哲学、言語学、記号学、社会学、……は、つぎのことを明らかにした(フッ
サル、ハイデガー、ソシュール、レヴィ=ストロース、……)：

- ①世界とは、われわれが構成した現実(reality)である。
- ②現実(そして、言語)は、さまざまな意味をもっている。
- ③意味は、さまざまな差異を対立させ、区別するところに成り立つ。(したがって、
言語は、“対立のシステム”である。)
- ④こうした意味や区別のあり方は、恣意的であり、文化相対的である。(区別に先立
って、区別されるものがあるのではない。われわれが構成しないかぎり、それはど
こにもない)

* われわれは、何らかの区別をせずには生きられない。ただし、区別のあり方は事前に
確定しているわけではないから、そのあり方を変えていくことができる。

2) 差別は、区別の特別な場合(区別されるものの中に、価値序列をつける場合)である。

- * (広義の)差別：区別されるものの中に、優劣、善悪、美醜などの価値序列をつける
こと一般。⇒(広義の)差別は、現実の構成のための不可欠の一部である。
- * (狭義の)差別：自らの属する集団やカテゴリーを優れたもの/他者の属する集団や
カテゴリーを劣ったものとして価値序列づけること。 ex. 人種差別、部落差別
⇒(狭義の)差別は、現実を構成するために不可欠でない。

□2□ ひとはどのように、ひとを差別してきたのか

1) カースト～インド(ヒンドゥー教)

- * アーリア人が先住民(ドラビダ人?)を征服して、被支配層とした。
⇒バラモン(祭司)・クシャトリア(戦士)/ヴァイシャ・シュードラ
- * 輪廻思想 バラモンだけが天人に生まれ変わる 下層に生まれたのは前世が悪い
～因果論 「人間」の概念が成り立たない(アン・ヒューマンズ) →差別の観念も成立せず
- * カースト：①直和分割、②線型順序、③生得的、④不変の慣習 cf. 日本にはない

2) 選民思想～ユダヤ(ユダヤ教)

- * 多民族競争状態(ユーゴスラビア状態)で、民族的同一性の確立が必要だった
⇒ヤーウェ(アブラハム、イサク、ヤコブの神)がユダヤ民族と「契約」を結ぶ
①神との契約(律法)を守れば、②国土と裕福と子孫の繁栄を保証する
⇒バビロン捕囚、エルサレム神殿崩壊を機に離散し、各地で信仰共同体を維持
- * キリスト教徒にとって、イエス・キリスト(神の子)の権威を認めない異教徒
⇒ユダヤ人は、差別・抑圧・迫害の対象に 人種弾圧と言うより宗教弾圧
⇒ユダヤ人は、宗教的自己同一性(民族教育)を核に、少数者として結束する

3) 差別道徳～中国(儒教)

- * 中国社会の二重体制 底辺の血縁共同体(宗族)/頂点の官僚制(科挙)
- ①中国はもともと、多民族国家だった。春秋戦国時代～民族錯綜と共通文化の登場
- ②帝国：統一は不完全 →国家は強大で、社会を攻撃 →民衆は人間関係を重視
- ③修身→齐家→治国→平天下 人間の行為は、人間同士の関係が確定したあと決まる
- * 儒教道徳……人間の差別待遇を自明視・正当化 コネ・裏口～「関係網」「后門」
・儒教の教養文化を身につけた人であれば、帝国の正統な構成員として認められる
・民族集団や少数民族についての差別、農民や商人や一般大衆に対する蔑視はあるが、
いわゆる「部落差別」に匹敵する現象はない。

4) 土農工商～日本

- * 江戸の身分制は、政府の命令(刀狩、兵農分離)によって生まれた(宗教、習俗に根
拠なし)。→政府の命令(四民平等)で、一夜にして解消(カーストでない)。
- * “エタ・非人”(被差別部落)がなぜ残存したか? →慣性(差別の再生産)機能
・日本の部落差別は、積極的な根拠がないので、原理的に解消できると考えられる。

□3□ 差別に対して、どのように立ち向かえばよいのか

- 1) 差別が生産されるメカニズム：宗教、権力、制度、慣習、……
差別が再生産されるメカニズム：学習、蔑視、汚穢観(偏見)、自己防衛、……
・どちらのメカニズムにも、自己の同一性を確認するプロセスが深く関与している
・前者のメカニズムが消失したあとでも、後者のメカニズムは存続する。
- 2) 差別に対抗するイデオロギー
* 平等・公平 同一の上位カテゴリー(たとえば人間)に属することの確認
→別種の差別を生み出す可能性、それでも差別が残る可能性
cf. 平等(Df.)：同じものは同じように、異なるものは異なるようにとり扱われること
* 価値観の逆転 部落開放フェスティバル～小林よしのり案
被差別者はエリートでありヒーローである
- 3) 差別に対抗する戦略
* 差別のメカニズムの科学的解明 差別者の心理 差別の社会的流連
* 差別に対抗する誤った戦略をとらない 差別語狩り エセ同和
* 同一性をどのカテゴリーで確認するかを、個別化する/多元化する/重層化する
* 日本社会の制度改革 平均的であることを評価 →個別的であることを評価

1995-11-13/18

淑徳公開講座
於・淑徳ホール

戦後50年・③

95年現象を語る

1995.11.6
橋爪大三郎
(東京工業大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月、社会理工学研究科価値システム(VALDES)専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研、近刊)ほか。

□1□ 95年現象とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があらわになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類: ①洗脳、マインド・コントロール、カルト教団、……～犯罪論的文体; ②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世代的論的文体; ③理工系人間、親子の断絶、……～社会学的文体; など。
しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは?
- 3) 95年現象(=危機)の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象?

□2□ 近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法 ・ 出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
・ 国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
・ 「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・ 過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
・ 自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
・ 過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・ 「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
・ 科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教～神道と習合 儒学～心情道徳に変貌
・ 宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物
- 5) 資本主義 ・ 「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
・ 官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育 ・ 「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
・ エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺

- 7) 政治 ・ 選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
- 8) メディア ・ 報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
・ 商業化、情報化と拮抗する価値観なし 「面白ければいい」～価値相対主義
☆これらに共通する特徴……普遍性をもった言葉を操るのが苦手の日本人

□3□ 国家の再構築、国家目標の再発見 ⇒日本の再定義へ

- 1) オウム教団の基本モチーフ
 - * 真理………価値相対主義(ポスト・モダン)の反対物 アナクロニズム
 - * 出家修行………現存の社会秩序への、強烈的嫌悪・否定の感情(←戦後民主主義)
 - * 階層制………受験的な上昇パターンへのこだわり 賞りの予備校 超能力=速度
 - * セル(小部屋)&区画への志向………個室(勉強部屋)の妄想の延長 つきあい下手
 - * 省庁制………国家への意志 ①アメリカと絶縁(ロシア正教の神政政治)
②使命(超越的価値・原理)にもとづく国家の再発見
- ☆今回の事件が人びとに深い衝撃を与えたのは、人びとの無意識に働きかけたから?
 - * 宗教法人法の改正………当然のこと(経理の公開) 破防法の適用………必要なし
- 2) 政治改革の難航
 - * 中選挙区制→小選挙区制 : 脱55年体制の器づくり 器はできたが、政治の実質は?
 - * 新進党の失敗 有権者の「選択」を優先しないで、政党の数合わせを先にした
 - * 国民を指導する(複数の)明瞭・簡潔な政治哲学(+リーダー) ⇒政党へ
- 3) 日本の再定義へ (詳しくは近刊『新生日本』を参照のこと)
 - * 戦後日本社会の薄弱な現実感覚 マス・メディアの増幅する仮想現実
 - 時間感覚: 歴史の欠如 自分を過去/未来からみる視点を想定できない
 - 空間感覚: 国際性欠如 日本人以外の行動パターンや価値原則を想像できない
 ⇒オウムそっくりでなくても、類似の原因による事件は不可避である
 - * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
ナイーヴなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)
 - * ポスト戦後日本は、「戦前的なもの」への復帰なのか
“日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
日本の与件: 位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
日本の条件: 産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標: 世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す ×単純な利他主義
- 4) VALDES (社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
 - * 日本社会に、まっとうな現実感覚を回復するために
政治の復権 社会リーダーの養成 価値前提→数理解析→意思決定
 - * VALDES : The Advanced Program for Values and Decision Science
入試: 哲学+数学 カリキュラム: 文系プログラム + 理系プログラム 人材: 最高意思決定に参画
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く) → 国家の再構築へ
- ☆日程そのほか、具体的な問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。

第2回コーポレート・ガバナンス・フォーラム
於：早稲田大学国際会議場
(c)哲学社会(学)セッション

意思決定とガバナンス
—— 権力を正当に行行使するために ——

1995. 11. 15
橋爪大三郎
(東京工業大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程
修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月に
大学院社会理工学研究科VALDES専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えれば
よいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての
構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書
店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会
を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大
問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を
救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研)、『オウムと近
代国家(仮題)』(共著・南風社)ほか。

□1□ 意思決定とは何か

1) 自由意思のパラドックス

- * 自由を厳密に定義するのは困難 cf. キリスト教では、人間の自由意思を認めない
- * 因果論では説明できない⇒そこに自由がある⇒意思決定すれば、他のことが後続する
- * 自由はそれ自身説明できない、他を説明するもの 因果論に不可欠な特異点

2) 理論経済学における意思決定

- * 選択肢集合(行動空間-制約条件)×選好構造(価値)⇒意思決定(最適解)
→選択肢集合も選好構造も与件なので、意思決定は機械的なプロセスになる
- * 選択肢集合や選好順序はどのように与えられる? ……意思決定論の枠外の問題
- * 社会的選好理論: Σ 個々人の選好→社会的選好 合成手続きΣは一般に存在しない
社会全体には、そのメンバーと同程度に「自由意思」があるとは言えない

3) 社会状況における意思決定

- * ゲーム理論 選択肢集合と選好構造は所与だが、相手の意思決定が読めないために、
自分の選択だけではどういいう社会状態が実現するかわからない。
→戦略(選好順序に付加すべき行動特性) 戦略は多様でありうる
- * 相互作用を織り込むべき一般の社会状況で、経済学の意思決定モデルは妥当しない

4) 意思決定とは何か

- * 選択肢集合も価値も、あいまいで暗黙
 - 形式化できるところは形式化(数式化)
 - 形式化できないところは言語化
- * 最後にいくつかの選択肢が残り、そのなかから最後にどれかを選ぶ(意思決定)。な
ぜそれを選んだかは、事前にはもちろん、事後にも説明できない場合が多い。
- * だからこそ、意思決定を正当化するため、その理由を言語化して支持をえようとする
意思決定の類型……慣習的(先例)/価値合理的(規範)/目的合理的(手段)

□2□ 意思決定・権力・ガバナンス

1) 組織における意思決定(組織唯名論 vs 組織実在論)

- * 個人における意思決定の構造は、意思決定する本人にとっても暗黙のもの
- * 組織における意思決定の構造は、組織内の権限/責任の関係として可視的になる

- * 組織唯名論……組織の意思決定は、個人の意思決定が組織を拘束するもの(top-down)
- * 組織実在論……組織の意思決定は、個人の相互行為が集積したもの(bottom-up)

2) 権力と意思決定

- * A→権力→B: Aが意思決定すれば、Bはそれに従う 権力は組織を形成する
組織の内部で、権力は権限のかたちで配分される
- * 近代社会では、逆に、一定の手続き(意思の集計手続き)が権力を樹立する
個々人の意思決定が正当な手続きを経れば、集合的意思決定に変形される
- * 組織内/外のすべてのメンバーが、権力(権利)を健全に運用する知識と能力を持っ
ていることが、組織が機能するための欠かせない条件となってきた

3) 意思決定とコーポレート・ガバナンス

- * 企業組織 消費者⇄(市場)⇄ [[従業員⇄管理者⇄経営者] ⇄株主] ……資本
市場を前提として存在する企業の行動(意思決定)がどのような力学で決定するか
- * 行政組織 有権者⇄(選挙)⇄ [[公務員⇄官庁⇄内閣・首相] ⇄議会] ……主権
選挙を前提として存在する政府の行動(意思決定)がどのような力学で決定するか
- * 市民社会には、“究極意思”が実体として存在するわけではない以上(それは分解で
きる!)、どんな意思決定も、多くの人びとの意思と整合することを(事後的に)検
証して正当化される必要がある。⇒“ガバナンス”が問題になる

□3□ 意思決定学とは何か

1) エコール・ポリテクニク(理工科学校)

- * 200年の歴史を誇るグランゼコールのひとつ。高級将校養成のため、数学・物理学な
どの基礎科学/経済学・人文学などの文系諸学/軍事教練や企業実習などの実地教育
を合わせたプログラム(大学院修士相当)。少数精鋭の軍人・官僚・実業家を輩出。

2) VALDES(東工大社会理工学研究科・価値システム専攻…平成8年4月新設予定)

- * 日本社会に、まっとうな現実感覚を回復するために
政治の復権 社会リーダーの養成 価値前提→数理解析→意思決定
- * VALDES: The Advanced Program for Value and Decision Science
入試: 哲学+数学 カリキュラム: 文系プログラム+理系プログラム 人材: 最高意思決定に参画
- * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く)→国家の再構築へ

3) 社会シミュレーション

- * 数十人が一定のシナリオのもと、数日を限って合宿、それぞれの役割を演じ、近未来
における意思決定を実習(シミュレーション)する。 cf. MIT、朝生
- * シナリオ開発…ありうべき前提から出発、各主体の対応に応じた枝分かれ図を設計
システム開発…いつでもどこでも、社会シミュレーションが実施できるデバイス
- * メリット: 問題を発見/当事者の意思決定能力向上/実験による予測/結果をPRし
て啓発/政策方針の正しさを検証/……

4) 社会のネオ・リーダー

- * 日本のリーダーは、創業者タイプ→組織内部でたたき上げた無難な能吏タイプ→停滞
- * リーダーになるための訓練が存在しうる リーダーをひとつの職能として捉えるべき
- * リーダーを訓練するのは、リーダーをやらせるのが一番
信賞必罰方式 小リーダー→中リーダー→大リーダー 自由競争&勝ち抜き

☆第1回説明会11月25日3:00~5:00。問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月に大学院社会理工学研究科VALDES専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研)、『オウムと近代国家(仮題)』(共著・南風社)ほか。

□1□ 民主主義とは何か

- 1) 古典古代の民主主義 民主主義は「衆愚政治」の意味、マイナス・イメージだった
王政/貴族制/寡頭政/僭主制/衆愚制 陶片追放 デマゴギー
- 2) 未開社会の民主主義 ゲルマンの部族社会 南洋諸島の部族社会
・全員が集会所に集まる ・長い演説 ・全員一致 政治集会=宗教儀式
- 3) 宗教会議の民主主義 サンヘドリン(ユダヤ教)、司教会議(キリスト教)
討論→多数決 多数のなかに神の意思が宿る(ゆえに不可謬)と想定されている
- 4) 近代の民主主義 法の支配:社会が、共通の法に服する法共同体として再編される
⇒民主主義:法共同体の法が、その構成員(市民)によって制定される(→循環)
Q:民主主義はどのように開始されるか? A:超法規的に民主主義の循環をスタートさせる(偉大なる立法行為~憲法制定権力~国民主権)
cf. カリスマによる支配/伝統による支配/合法的支配

□2□ 民主主義はどのように誤解されやすいか

- 1) 村の寄り合い これは、未開社会の民主主義に近い “全員一致”が理想
*「みんな仲良く」:意見の相違がないことが望ましい
討論するのは、意見の相違(利害の対立)がある証拠
←→本当の民主主義は、意見の相違(利害の対立)があるからこそ、必要なのである。
- 2) 多数決と全員一致
*多数決……どの意見が多数であり、どの意見が少数であるかを確認する手続き
→討論のなかで、コンセンサス(多数意見)が形成される
→少数意見は、記録にとどめられ、多数意見が誤っていた場合に復活する
*全員一致……すべての人びとが、その決定に加わったことを確認する手続き
→実質的な意思決定のプロセスは、事前の合意形成(根回し)にある
→討論は、反対の可能性を示す「ガス抜き」(儀式)として機能する
→あとで誰かが、結論に文句を言ったり、結果責任を追及したりするのを防ぐ
→責任はすべての人びとに分散する(集合的無責任)。誰が意思決定したのか?
→個々人の実在観よりも、集団の実在観のほうが優先する
- 3) 学級民主主義 学校のなかで、本当の民主主義は学べない
*学級民主主義は、教師の例外的権力を前提にする(特に小学校の場合)
*学級民主主義は、コスト(～税金～責任)がかからない 言論も行動も無責任に
*学級民主主義は、「みんな仲良く」のイデオロギーに浸透されている

□3□ 日本における民主主義の系譜

- 1) 明治維新と民主主義
*「広く会議ヲ興シ、万機公論ニ決スヘシ」～五箇条誓文 ×公武合体、諸侯会議
→天皇専制 旧権力を打倒するための、神聖な絶対権力が必要だった
*自由民権 不平士族グループ+地方名望家グループ+青年知識人グループ
→議会開設&大日本帝国憲法 その実、不平等条約改正のためのアリバイだった
- 2) 旧憲法と民主主義
*立憲君主制:天皇(=主権者)+臣民(=被統治者) 憲法は天皇から臣民への恩恵
「臣民」は旧憲法の造語 臣(男の奴隷→君子の代理として人民を統治する官僚)
→nationの成立 +民(君子に統治される農民・一般人民)
*臣民の権利義務は、公共の秩序の範囲内。臣民は国家を相手に行政訴訟を起こせない。
*統帥権の独立(行政と軍事の分離)→軍部の暴走
もともとは人民や、その代表である議会から、国家を守るための憲法だった
- 3) 新憲法と民主主義
*日本占領:連合最高司令官-天皇-日本国政府-日本国民 条約にもとづく独裁
*新憲法~旧憲法の改正憲法~帝国議会による審議?日本国民の自由に表明する意思
*日本国憲法(9条=戦争放棄・非武装)/日米安保条約(=自衛力・軍事同盟)
解釈改憲のつみ重ね ⇒憲法(遵法意識)に対する国民の感覚が麻痺
*議会制民主主義・議院内閣制~自民党一党支配(政権交替なし)~民主主義の未熟

□4□ 民主主義のために、これから何ができるか

- 1) 政治改革を成功させる
*改革のポイント……有権者が、①候補者を選べる(予備選)、②政策を選べる(政策論争)、③政権を選べる(小選挙区・二大政党制)、④政治をチェックできる(政治資金)。要するに、有権者の選択制(責任)が高まるということ。
*単純小選挙区制(250議席)+次点歳費制(次点候補は、つぎの選挙まで歳費をえて活動できる~選択枝の確保)+議会の政策立案能力・国政調査権を拡大
*政党改革(党員チケット制/予備選/シンクタンク/党内民主主義/党財政の自立)
- 2) ジャーナリズムを改革する
*大新聞のリストラ(サラリーマン記者を解雇/本社機能縮小/年俸+原稿料方式/記者クラブ解体/宅配廃止~テレビ配送へ) 事実/意見の分離 責任報道
*電波解禁/地上波ネットワーク→衛星×ケーブル/新聞・テレビ・広報の融合
- 3) 教育を改革する 受験をなくすことは当然として……
*言語教育 正しい感想をのべる練習 →事実/意見をのべる練習
*選択性の拡大・教科担任制(小学)・マスタークラス(得意なものを伸ばす・中学)
・単位制の拡充&自由学年制(高校)・学区&定員の廃止、自由競争(小~高)
- 4) 思想を改革する 無責任な子供の言論を脱すること
*情報・知識としての言説から、規範・倫理としての言説へ ×言葉と身体の内離れ
言論は、認識の用具である以上に、意思一致と実行のための用具である
- 5) VALDES(社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
*日本社会に、まっとうな現実感覚を回復するために
政治の復権 社会リーダーの養成 価値前提→数理解析→意思決定
*VALDES:The Advanced Program for Value and Decision Science
入試:哲学+数学 カリキュラム:文系プログラム+理系プログラム 人材:最高意思決定に参画
*それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く)→国家の再構築へ

☆第1回説明会11月25日3:00~5:00。問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。

1995-11-16/18

川越東高校
進路講演会

受験・大学・人生

1995. 11. 25
橋爪大三郎
(東京工業大)

□0□ 講師自己紹介 (はしづめ だいさぶろう)

- * 1948年神奈川県生まれ。47歳。社会学者。1972年、東京大学文学部社会学科卒業。1977年、同大学院社会学研究科博士課程修了。以後無所属で執筆に専念。1989年、東京工業大学助教授(社会学)。1995年、同教授。
- * 『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればいいのか』『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』(勁草書房)『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(講談社)『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)『新生日本』(共著・学習研究社)『大問題!』(幻冬社)『性愛論』『崔健』(岩波書店)ほか。

□1□ 受験とは何なのだろう

- 1) 受験は、通過儀礼(成人式=イニシエーション)である
 - * イニシエーション: 子供から、成人(社会の正式メンバー)になるための儀式(試練)
 - ①危険、②孤独、③成功/失敗 「死→再生」がテーマのドラマ 家族から社会へ
 - * 試練をくぐり抜けたことが、成人の資格 → 試練の種類は何でもいい?
 - 実際には、高校で習得した学科/大学に必要な学科、のどちらの試験なのか曖昧
- 2) 受験は、階層形成原理である
 - * 職業選択の自由(憲法)～競争(混雑現象)～選抜(事前:資格、事後:市場の競争)
 - 後進国は学校(教育チャンス)が少ない～学歴によるポスト配分～待遇・威信高い
 - * 日本は、教育が大衆化したあと、学歴でなく学校歴社会になった 「いい学校」信仰
- 3) 受験は、日本株式会社の入社試験である
 - * いい会社←いい大学←いい高校←いい中学←いい小学……
 - 日本社会は、外部との競争を嫌う(組織のなかでだけ競争させる、×中途採用・編入)
 - ⇒入社の段階で選抜せざるをえない⇒「受験」をくぐり抜けてきた人材を信用
 - * 会社人間: 疑問を持たずに仕事に打ち込む/家族をかえりみない/平均以上なら満足
 - ★それなら、試験を利用して、一生覚えておくに値することを身につけてしまおう。

□2□ 大学とは何なのだろう

- 1) 大学(名前がわるい)は、小・中・高より先にできた → 大学は人類の知的共同体
 - * 大学をつくったイスラム教徒: 『コーラン』(イスラム法)を研究 世界中から留学 中世の大学～医学/法学/神学… 卒業したら資格がえられる=職業ギルド

- * 大学は国際機関 ∴学位(ドクター、マスター)、教授身分、カリキュラムは世界共通である
 - ×日本の大学は、外国人(学生、特に教員)に門を閉ざしている(明治に追い出した)
 - ×文部省が、学校法人法、大学設置基準法などで監督 ←→ハーバード 大学はアメリカより古い
- 2) アメリカの大学はいま、どう運営されているか
 - * 入学試験はない 誰でも入れる/卒業はむずかしい(統一試験、キックアウト、単位制)
 - 月謝は高い/奨学金も多い(学費は自弁が当たり前、社会人も多い)
 - * 競争が激しい 大学も倒産する/教授の引き抜き/学生も移動/世界中の人間がいる
 - * マチマチに勉強(ただし週末は休み) ∴奨学金に影響/就職に影響/高校まで勉強が楽
 - * 大学院が充実 学部は専門の一步手前 法学/医学/理工系はみな大学院が本番
- 3) 日本の大学はどう変わらなければならないか
 - * 入学試験をなくす、国立大学を民営化する、大学設置基準(特に定員)をなくす
 - 階層形成機能はなし。実力判定の目安には奨学金を使えばよい。
 - ★大学は断じて、高校の延長ではない。ディズニーランドでもない。目的をもって進め。

□3□ 人生とは何なのだろう

- 1) 人生は予測がつかない ——それでもひとつのストーリーに組立てられる
 - * 受験はなぜ支持されるか⇒公平だから 日本人は、誰でも努力すればできると考える
 - * 受験・大学がなければ…… ×職業選択の自由→職業世襲: これはこれでかなり辛い
 - * だが、受験・大学と職業は直結しない(除:医学部) 人生に偏差値はないのだ
 - * 大学、職業、結婚、人生のさまざまな選択…… それを自分らしく潜り抜けていくこと
- 2) 世間的な価値(他人の眼)と、自分の充実と、どちらを大切にします?
 - * 暴走族、小林よしのり氏、高城剛氏 受験のルールに乗る連中を軽蔑する感じ
 - 暴走族も不良も、就職すると直ってしまう ∴生活には一人ひとりの喜びがある
 - * 偏差値、一流校、……～すべて他人による評価 →それを自分も基準にしてしまえば、一生他人に縛られる それよりも、自分のなかに自分の基準を持つ
 - * 自分が充実していれば、それで満足。他人がしっかりやっていたら、余計な干渉しない
- 3) エゴイズムを超え、他者と関わりつつ生きるために
 - * 自分が充実する≠自分さえよければいい(エゴイズム) エゴイズムは虚無に通じる
 - ・自分が幸福になる権利を否定する考え方は、どこか欺瞞がある(cf. 文化大革命)
 - ・しかし、他人の不幸せに目をつぶる考え方は、やはり欺瞞 ∴自分の幸福も充実も他人(これまでの人間たち)の労苦のうえに築かれてきたのだから
 - * 自分の人生にこだわっているかぎり、自分の人生は完結できない(外の視点がない)
 - 自分の人生が何のためにあったのか、を考えるためには、自分の人生より大きな何かを信じていることができないとだめ それが何かは、あとでわかればよい(焦るな)

1995-11-17/18

国際交流基金
日本語教育センター

平成7年度在外邦人日本語教師研修
95年現象を読む

1995.12.12
橋爪大三郎
(東京工業大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程
修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月、
社会理工学研究科価値システム(VALDES)専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えれば
よいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての
構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書
店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会
を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大
問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を
救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研)ほか。

□1□ 95年現象とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があら
わになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類: ①洗脳、マインド・コントロール、カル
ト教団、……～犯罪論の文体; ②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世
代論的文体; ③理工系人間、親子の断絶、……～社会学的文体; など。
しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは?
- 3) 95年現象(=危機)の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象?

□2□ 近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法 ・ 出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
 - ・ 国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
 - ・ 「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・ 過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
 - ・ 自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
 - ・ 過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・ 「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
 - ・ 科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教～神道と習合 儒学～心情道徳に変貌
 - ・ 宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物
- 5) 資本主義 ・ 「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
 - ・ 官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育 ・ 「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
 - ・ エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺

- 7) 政治 ・ 選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
 - 8) メディア ・ 報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
 - ・ 商業化、情報化と拮抗する価値観なし 「面白ければいい」～価値相対主義
- ☆これらに共通する特徴……普遍性をもった言葉を操るのが苦手な日本人

□3□ 国家の再構築、国家目標の再発見 ⇨日本の再定義へ

- 1) オウム教団の基本モチーフ
 - * 真理………価値相対主義(ポスト・モダン)の反対物 アナクロニズム
 - * 出家修行………現存の社会秩序への、強烈な嫌悪・否定の感情(←戦後民主主義)
 - * 階層制………受験的な上昇パターンへのこだわり 覚りの予備校 超能力=速度
 - * セル(小部屋)&区画への志向………個室(勉強部屋)の妄想の延長 つきあい下手
 - * 省庁制………国家への意志
 - ①アメリカと絶縁(ロシア正教的神政政治)
 - ②使命(超越的価値・原理)にもとづく国家の再発見
- ☆今回の事件が人びとに深い衝撃を与えたのは、人びとの無意識に働きかけたから?
- * 宗教法人法の改正………当然のこと(経理の公開) 破防法の適用………必要なし
- 2) 政治改革の難航
 - * 中選挙区制→小選挙区制 : 脱55年体制の器づくり 器はできたが、政治の実質は?
 - * 新進党の失敗 有権者の「選択」を優先しないで、政党の数合わせを先にした
 - * 国民を指導する(複数の)明瞭・簡潔な政治哲学(+リーダー) ⇨政党へ
 - 3) 日本の再定義へ (詳しくは近刊『新生日本』を参照のこと)
 - * 戦後日本社会の薄弱な現実感覚 マス・メディアの増幅する仮想現実
 - 時間感覚: 歴史の欠如 自分を過去/未来からみる視点を想定できない
 - 空間感覚: 国際性欠如 日本人以外の行動パターンや価値原則を想像できない
 - ⇨オウムそっくりでなくても、類似の原因による事件は不可避である
 - * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
ナイヴなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術)→その否定(経済優先)
 - * ポスト戦後日本は、「戦後的なもの」への復帰なのか
“日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
日本の与件: 位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
日本の条件: 産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標: 世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す ×単純な利他主義
 - 4) VALDES(社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
 - * 日本社会に、まっとうな現実感覚を回復するために
政治の復権 社会リーダーの養成 価値前提→数理解析→意思決定
 - * VALDES: The Advanced Program for Value and Decision Science
入試: 哲学+数学 カキユム: 文系プログラム+理系プログラム 人材: 最高意思決定に参画
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く)→国家の再構築へ
- ☆日程そのほか、具体的な問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。

18

1995-11-18/18

杉並区立中央図書館	第3回	1995.12.17
世紀末・JPOPの泳ぎ方	<u>95年危機を越えて</u>	橋爪大三郎
		(東京工業大)

□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東工大人文社会群に勤務。1996年4月、社会理工学研究科価値システム(VAldES)専攻発足の予定。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』(共編著・富士通ブックス)、『新生日本』(共著・学研)ほか。

□1□ 「95年危機」とは何か

- 1) 阪神大震災、オウム・サリン事件、円高・複合不況 → 日本社会の構造的弱点があらわになった。(アジア諸国の、日本モデルからの離反。日本の国際的評価の失墜。)
- 2) オウム・サリン事件を語る、語り口の種類：①洗脳、マインド・コントロール、カルト教団、……～犯罪論的文体；②サブカルチャー、ハルマゲドン、オタク、……～世代論的文体；③理工系人間、親子の断絶、……～社会学的文体；など。
しかし、これらの文体が届かない深いところで、日本の解体が始まっているのでは？
- 3) 「95年危機」の意味
 - i) ポスト冷戦が、日本に波及 55年体制の崩壊→統治能力の解体(無能首相)
 - ii) 日本の戦後50周年 「戦後的なもの」が社会を覆いつくしたための現象？

□2□ 近代の正統モデルが、半身不随に陥っている

- 1) 憲法 ・ 出発点からその正統性に疑問が 60年安保 70年学生叛乱
 - ・ 国民と権力の統治契約でなく、日本とアメリカの統治契約
 - ・ 「法の支配」に対する抵抗感 → 人間関係の実質を優先(機能集団の自閉)
- 2) 歴史 ・ 過去/現在/未来、自己/他者、加害/被害を貫通する視点(文体)の設定
 - ・ 自己中心的言説の氾濫 心情・感性・利害・イメージの優先
 - ・ 過去が現在を支配することに対する嫌悪 構築的な社会原則の否定
- 3) 科学 ・ 「哲学的孤独に耐える自己」の不在 論理・批判的認識・職業倫理の未熟
 - ・ 科学はもうひとつの「体系的な世界観」で、闘争を通じて宗教から分離した
- 4) 宗教 ・ ドグマ・権威に対する嫌悪 仏教～神道と習合 儒学～心情道徳に変貌
 - ・ 宗教は、現実生活に対する二次的・機能的補完物
- 5) 資本主義 ・ 「資本家」の不在 利潤追求は、企業の機能的要請にすぎない
 - ・ 官僚機構のプレゼンス 企業の横並び 新規参入への妨害
- 6) 教育 ・ 「受験」による教育の空洞化 教育の内容(知識)に対するニヒリズム
 - ・ エリート教育の不在 高等教育の機能麻痺

- 7) 政治 ・ 選択の回避、意思決定の回避→政治の回避 55年体制下、政治は儀式だった
 - 8) メディア ・ 報道の文体(事実/意見)の未成立 ジャーナリスト職の未確立
 - ・ 商業化、情報化と拮抗する価値観なし 「面白ければいい」～価値相対主義
- ☆これらに共通する特徴……普遍性をもった言葉を操るのが苦手な日本人

□3□ 日本人はなぜ、自分を見つけるのがむずかしいのか

- 1) 日本近代の秘密
 - 第1段階：1868～1945 国家は神聖である(日本=天皇制共同体) ←→キリスト教
 - 第2段階：1945～1989 企業は神聖である(日本株式会社) + アメリカの大外護
 - 第3段階：1989～ 個人を超える原理なし(⇒国家は世俗の機関=普通の国)
 - cf. 個人の欲望は神聖でない→個人を超える神聖原理があるはず→オカルト・オウム
 - 2) ヨーロッパ近代の秘密
 - * 神は神聖→被造物(個人)は神聖(ただし個人の自由意思は卑俗) → 社会は卑俗
 - * 支配文明である欧米世界の住人は、ストレートに自己を確認できる(ソフィーの世界)
 - cf. 日本の場合、原住民の文化/中国の外来文明/西欧の外来文明、と重層している
 - * 個人を超越する原理⇒自己を確認 cf. 個人の相対的な関係⇒自己を確認(日本)
 - 3) 日本の再定義(自己確認のための共同作業)へ (詳しくは『新生日本』を参照)
 - * 日本の個人はとりあえず、自己を「日本人」として確認 ~だが、あいまいな日本
 - * 戦後日本社会の薄弱な現実感覚 マス・メディアの増幅する仮想現実
 - 時間感覚： 歴史の欠如 自分を過去/未来からみる視点を想定できない
 - 空間感覚： 国際性欠如 日本人以外の行動パターンや価値原則を想像できない
 - ⇒オウムそっくりでなくても、類似の原因による事件は不可避である
 - * 戦後日本の定義 大日本帝国→日本国(多民族→単一民族、拡張主義→孤立主義)
 - ナイーブなナショナリズム→鬱屈したコスモポリタニズム
 - 戦略的国家目標(政治/軍事/外交/経済/学術) → その否定(経済優先)
 - * ポスト戦後日本は、「戦後的なもの」への復帰なのか
 - “日本=自然単一民族”説の克服→「外国人」もまた日本の正統な構成員であること
 - 日本の与件：位置・自然環境・日本語・社会伝統・歴史・産業・経済力
 - 日本の条件：産業化した日本は、世界との連携のなかでしか生きられないこと
 - * 国家目標：世界が共存できるための条件を、積極的に作り出す ×単純な利他主義
 - 4) VAldES (社会理工学研究科・価値システム専攻……平成8年4月新設予定)
 - * 日本社会に、まっとうな現実感覚を回復するために
 - 政治の復権 社会リーダーの養成 価値前提→数理解析→意思決定
 - * VAldES :The Advanced Program for Value and Decision Science
 - 入試：哲学+数学 カキョリム：文系+理系+理系+理系 人材：最高意思決定に参画
 - 第2回「内容説明会」は、12月22日(金) 3～5時、大岡山西3号館にて開催
 - * それぞれの機能集団が社会的に機能する(国際標準で動く) → 国家の再構築へ
- ☆日程そのほか、具体的な問い合わせは、☎ 03-5734-2667 橋爪研究室まで。